

巻頭言

帰国子女教育が示唆するもの

会長 小島 勝

「帰国子女教育を考える会」が発足したのは1990年であるから、それから早16年余の歳月が過ぎたことになる。

1990年といえば、もはや“海外帰国子女教育のブーム”が下降してきた時期である。にもかかわらずこれだけ長く会を継続できているのは、「考える会」の愛称のもとに、同志社国際、千里国際、神戸大学附属住吉などの帰国子女教育推進校や金梅研、財団、「エコー」や「かけはし」などの親の会、企業の相談員の先生方それに研究者などが並々ならぬ思いや懸念・情熱をもってこの問題に真摯に取り組んでこられた賜物と心よりおりがたく思っている。この度も、事務局に大阪YMCAのご協力をいただけることになり、よりいっそう着実な活動の継続ができると喜んでいる次第である。

私は、この3年間、文部科学省科学研究費補助金をいただいて、「異文化間教育に関する横断的研究―共通のパラダイムを求めて―」の研究に取り組んできた。海外帰国子女教育・留学生教育・外国人子女教育・多文化教育・外国語教育などの研究者22名にご協力いただいて、これらの研究に共通する研究枠組み・理論モデル・キーワードの析出を日ざしたのである。その結果、これらの教育分野に共通した「研究主題」として、適応、アイデンティティ、言語、コミュニケーション、発達・成長、カウンセリング、文化観、資質・能力、教育・学習、研究方法、社会体系、人間観、共通の「研究の観点」として、二（多）元性・異質の共生、（異文化）間性・双方向性・相互性/相対性・第3の見地・普遍性、関係性・対等性・権力性、相互変容性・構築性・創造性などを見いだした。

詳しくは近日に発行する報告書をご覧いただきたいが、これらの「主題」と「観点」は、研究分野に限らず実践分野においても参考になる「主題」と「観点」であると思う。帰国子女教育においても、「主題」に相当する局面に目を配り、「観点」と同様の見方をもって取り組む必要があると考えている。そして、「主題」のように帰国子女教育も多面的に見ていく必要があり、これらの「観点」は従来の教育観を大きく変革する可能性をもっている。言うなれば、帰国子女教育は、これまでの教育のありようを大きく変革していく可能性に満ちている宝庫なのである。そこに、「考える会」の未来もまたあると言えよう。

関心のある方々のよりいっそうのご協力をいただきながら、より充実した活動が展開されることを切に祈念します。